

日本語学習者の能動態と受動態の使用傾向にみられる母語による違い ー中国語とドイツ語での語りの比較からー

奥野 由紀子・呉 佳穎・村田 裕美子¹

1. はじめに

第二言語を習得するうえで、母語（あるいはそれ以外の既習言語）と目標言語における言語間の影響がどの程度重要性を持つかというテーマは著しい変遷を経て今日まで論じられている古くて新しい問題である。Odlin (1989) は、対照分析によって提供される言語の比較に頼るところが大きいとしているが、いかに対照分析が優れていようとも、転移の発生を確証するためには、母語を異にする2つあるいはそれ以上のグループ間の言語運用の比較が有用かつ必要であるとしている。しかしこれまで、複数の言語を対象としてレベルや学習環境を統制した上で、言語構造をふまえ複数言語のデータを収集して比較を行うことは現実的には難しかった²。しかし、近年日本語学習者コーパスが整備されつつあることから、複数の母語の異なる学習者グループごとの比較が可能となっており、母語にかかわらず見られる現象と母語によって異なる現象の検証などの可能性が以前と比べると格段に高まってきている。

本研究は、日本語を第二言語とした習得研究の発展と貢献を目指し構築されている『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) 』におけるストーリー描写課題の学習者の語りを分析する一連の研究を継続するものである。これまで主に「話す」課題と「書く」課題（以下、S 課題、W 課題）における違いなど母語にかかわらず見られる現象とその原因について考察されてきたが、本稿ではその中でみられた学習者の母語による違いが顕著であった能動態と受動態の使用傾向に着目し、コーパスには収録されていない母語での語りのデータを独自に収集して比較し、考察を試みるパイロットスタディである。

2. I-JAS のストーリー描写課題の分析における研究成果

本節では、I-JAS のストーリー描写課題において明らかとなっている主な研究成果についてまとめる。I-JAS とは、現在構築中の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) 』(国立国語研究所公開) である。12 の異なる母語の海外における教室環境

¹ 中国語を母語とする呉が中国語母語話者のデータを、ドイツ在住の村田がドイツ語母語話者のデータを収集した。

² 奥野 (2000) では、当時、1 言語のみを対象として言語転移と結論づけている研究が多いことを示し対象とする言語数が多い研究ほど母語の影響であると断定する割合が低いことから、1 言語のみを対象として言語転移であると結論づけることは恣意的、主観的判断の危険性が高いと指摘している。

日本語学習者、および日本国内の教室環境学習者、自然環境学習者、成人日本語母語話者学習者による発話と作文が収録されたコーパスであり、レベルを判定するテスト及びインタビューやストーリーテリング、作文タスクを実施し、将来的には 1000 人分のデータ公開を目指している（迫田他 2016）。その中の 5 コマのストーリー描写課題を対象とした研究として、奥野・リスダ（2015）、奥野（2016, 2018）、砂川（2016）、小口（2017, 2018a,b）、迫田（2019）、南（2018）、徐（印刷中）などがある。ここでは、本研究で取り扱う「ピクニック」（図 1 参照）に焦点をあてている研究成果を紹介する。

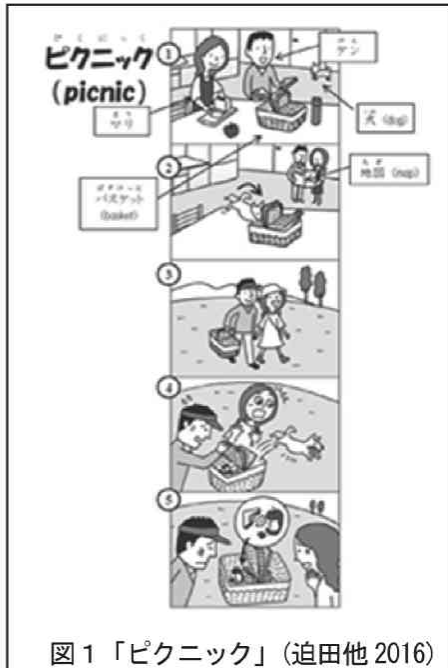


図 1 「ピクニック」（迫田他 2016）

一連の研究の端緒をなす奥野・リスダ（2015）は、I-JAS の公開前の言語データからインドネシア語、英語、ドイツ語、タイ語、中国語を母語とする日本語学習者各 15 名、計 75 名と、当時まだ収集されていなかった日本語母語話者のデータを独自に収集し、「ピクニック」の場面⑤にあたる語りの終結部を分析した。「話す」と「書く」という産出方法の違いによる中間言語変異性に着目し、言語形式の複雑性と正確性という観点から分析した結果、母語話者にはほとんど言語形式の違いが見られなかったが、5 つの異なる母語の学習者の結果には、話すタスクよりも書くタスクにおいて「受身」と「～てしまう」を複合的に用いる、より複雑な言語使用が多く見られ、L2 ではタスクの実施方法の違いが言語形式

の複雑さに影響する可能性を示している。同時に、日本語母語話者には出現する「食べられてしまって（い）ました」のような結果残存の「～ていた」の使用が学習者には全く見られないことも指摘している。個人内における複雑さと正確さを分析した結果、W 課題で S 課題よりも複雑なパターンになるケースが多いものの、W 課題でより複雑な形式を使用しようとしたがゆえに正確さが落ちる逆行現象がみられる場合もあること、正確さを高めるためにより単純な形式を使用する場合もあること、時間的猶予のある W 課題でも不正確なままなどのケースがあることを明らかにしている。奥野（2016）では上記の学習者の結果を情報処理理論に基づくタスク・プランニングの観点からさらに考察し、作業課題による中間言語変異性には、運用に至る言語処理的知識や、自らの運用を客観視するメタ言語的知識、形式に対する言語学的知識が関与している可能性を指摘している。奥野（2018）では、奥野・リスダ（2015）、奥野（2016）の研究をさらに進め、第一次データを用いて母語の数を増やし、英語、ドイツ語、タイ語、ハンガリー語、スペイン語、フランス語の 7 つの異なる母語の各 15 名の学習者のデータと日本語母語話者 15 名を対象に分析を行い、母語に共通して見られる現象

と母語により異なる現象について検討している。その結果、母語の違いにかかわらず見られた共通点として、母語数を増やしても話すタスクには単純な形式（例「犬が食べた」）が多く現れ、書くタスクにはより複雑な言語形式（例「犬に食べられてしまった」）が現れる傾向は奥野・リスダ（2015）と同様であったことを挙げている。また、日本語母語話者には見られる「テイタ」の使用が母語にかかわらず見られないことについて、ストーリー描写課題の場面②では「ケンとマリが地図をみているときに」というように動作継続の「～ている」は使っているが、物語の終結部における「～ていた」が出現しないことを示した。そして結果残存の「～ていた」には過去の一時点である「観察時」に発話者の「視点」があるという性質から、ストーリー描写のような語りの視点の置き方が母語にかかわらず学習者にとって習得が難しいことを指摘している。さらに、母語による傾向の違いについて、中国語母語話者は受動文を使用して表現するが、英・独・西・洪・仏語母語話者は「犬」を主語として顕在化させ、8割以上が能動文を使用して表現すること、能動態を使用する際に「残念でした」「悲しかった」などの情意表現を使う傾向が多いことを示し、母語の言語体系から、そこには母語の影響の可能性が存在することを指摘している。

小口（2017）では、新しい出来事の生起や意外性のある場面でどのような表現を用いるのかについて、接続表現に着目し、第一次公開データに収録されている中国語、英語、韓国語、ハンガリー語の学習者及び日本語母語話者各15名、計75名のS課題を分析している。その結果、母語話者では後件の意外性が実現する様子を表す「と」系が多いが、学習者では前件と後件の事態が同時に起きることを表す「とき」系や順に起きることを表す「て」系の使用が多いということを明らかにした。また、母語話者は「なんと」のような意外な出来事を表す副詞を用いているが、学習者には見られなかったことを示した。さらに小口（2018a）では、W課題を追加し、母語話者は作業課題の違いにかかわらず後件の意外性が実現する様子を表す「と」系が多いが、学習者は「とき」系や「て」系がS課題では多く、W課題では前件をきっかけに後件の事態が起こる連続的な動作や意外性を含む「と」系、「たら」系が増える事例が個人内に多いことを明らかにした。そこから、プランニング時間の多いW課題ではメタ的な言語知識が働き、「て」系の使用を避ける傾向にあるが、発話のように即時的な運用を求められる場合には「て」系を多用してしまうのではないかと考察している。

迫田（2019）では、さらに母語を増やし、第一次公開データ12言語の母語話者（インドネシア語、英語、韓国語、スペイン語、タイ語、中国語、ドイツ語、トルコ語、ハンガリー語、フランス語、ベトナム語、ロシア語）全105名を対象として、「受身」「～てしまう」「有対自他動詞」「助詞」の4つの文法項目の言語使用について分析した。その結果、「受身」「～てしまう」の使用状況については、奥野・リスダ（2015）と同様、W課題では、S課題であまり見られなかった「受身」「～てしまう」がより多く使用され、言語形式が複雑になる傾向があることを示した。また、タスクによる正確さのバリエーションについて、「有対自他動詞」や「助詞」の場合も、W課題で正用に転じる場合もあれば、誤用のままの場合もあり、正用から誤用に転じる場合も見ら

れることを示し、プランニングの効果が必ずしも正確さに結びつくとは限らないことを示した。そして、「有対自他動詞」「助詞」の誤用傾向には、母語の違いによる大きな差異は見られなかったが、「受身」「～てしまう」では、奥野（2018）と同様に母語による違いが見られたことを示している。

これらの研究から、W 課題と S 課題には中級学習者の場合には項目に限らず差がみられる傾向にあるが³、必ずしもプランニングの有無が正確さにつながるとは言えないこと、母語による傾向の差は言語形式によっても異なる可能性があることがわかる。

南（2017）は、比較言語研究を行うことで、語りの発達過程の言語普遍性と言語固有性が明らかになること、また、語りの構造は話者の文化的背景によって異なる側面があり、特に、時制や態など語用面での機能の解明は、語りのためのデバイスをどのように効果的に活用すべきかという問題に対して、示唆を与えてくれるのだと指摘している。そして南（2018）では、I-JAS のストーリー描写課題「ピクニック」と「鍵」を対象に、中国語母語話者、台湾中国語母語話者、英語母語話者、日本語母語話者各 50 名のデータ⁴について、時制と態をどのように使いながら、どのような視点から事象を捉えているのかについて分析している。その結果、日本語母語話者はトピックに関わらず、受動態の使用頻度が高く、視点が主人公に固定される傾向にあること、中国語母語話者は「ピクニック」では受動態の使用が多いが「鍵」では能動態の使用が多いことからトピックによる違いがあること、英語母語話者はトピックに関わらず能動態の使用が多いことを明らかにし、母語の影響の可能性を指摘している。しかし、母語ではどのように語られるのか、という視点からの検証は未だなされておらず課題とされている。

そこで本研究では、奥野（2018）や南（2018）で指摘された能動態・受動態の使用傾向について、方法論的課題とされている母語によるストーリー描写課題と日本語学習者による日本語での結果を比較し、L1 と L2 でどのように語ることかという観点から検討する。

3. 調査概要

3.1 対象とする言語データ

日本語によるデータは、I-JAS の一次公開データからの中国語を母語とする日本語学習者 15 名、ドイツ語を母語とする日本語学習者 15 名を対象とした。日本語母語話者 15 名も抽出した⁵。また、中国語とドイツ語によるデータについては、日本語を学

³ 徐(印刷中)は、I-JASの別のストーリー描写課題「鍵」を対象に名詞修飾の使用について分析し、日本語母語話者と韓国語母語話者はS課題よりW課題のほうが名詞修飾の使用が多いこと、中国語母語話者は課題による使用差が少ないこと、習熟度があがるにつれ名詞修飾の使用が増加すること、その傾向は母語により異なることから母語の影響の可能性を指摘している。

⁴ 習熟度の統制は行われていない。

⁵ I-JAS より被調査者番号偶数の若いものから 50 名中 15 名を抽出した。

習した経験のない中国語母語話者 15 名、ドイツ語母語話者 15 名⁶の各母語によるデータを今回独自に収集した。ドイツ語と中国語を対象としたのは、奥野（2018）において分析した 7 言語のうち、受動態と能動態の使用傾向が最も異なる 2 言語であったためである。

堀江・パルデシ（2009）では、自然言語に見られる普遍性と可変性を人間の認知に動機づけ、説明する立場である「認知類型論」のケーススタディとして、複数の言語の受動構文⁷を対象として比較している。また、受動構文の使用に見られる言語間の相違は描写の対象である事態の捉え方の違いに由来すると主張し、語り手が事態をどの視点から主観的に捉え描写するかは動機づけられていることから、受動態を言語の〈主観性〉の一指標として捉えている。そして、中国語をはじめ東アジア諸語や東南アジア諸語では被害の概念と受動構文の使用は密接に関係しており、被害を受ける者の視点から事態を描写する傾向が強いということを各言語母語話者へのアンケート等から明らかにしている。そして類型論的調査の結果から受動構文の主観性の尺度を提示している。それによると東アジアの中の言語の中でも日本語は受動構文の主観性が最も高く、英語などの印欧語は主観性が低く位置付けられている。このことから、中国語とドイツ語母語話者には事態の捉え方に違いがあり、それが受動構文の使用の違いにも影響している可能性が考えられる。

3.2 調査方法

I-JAS では、次のようにデータ収集された。学習者には、図 1 の 5 コマ漫画が提示され、まずは、S 課題としてストーリー描写課題が課された。次に、対面インタビュー（今回は分析の対象外）を 30 分程度行った後、再度同じ絵を見て、今度は W 課題としてパソコンでストーリーが入力された。S 課題では、まず、よく絵を見てください、と指示され、「ピクニック」というタイトルと「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」ということばに続けてストーリーを話すよう指示された。W 課題では同様の絵を見て、学習者のペースで PC に入力するよう指示された。書く時間は特に指定されず 10 分程度であった。

今回独自に収集した非日本語学習者の中国語母語話者、ドイツ語母語話者にも、同様の 5 コマ漫画を提示し、同様のインストラクションを中国語・ドイツ語で指示した。まず S 課題として母語によるストーリー描写課題を課した後、パソコンもしくは手書きでストーリーが書かれた。書く時間は特に指定していないが 5 分程度であった。

3.3 分析対象

分析対象は奥野・リスダ（2015）、奥野（2016、2018）と同様、5 コマ漫画の場面⑤を対象とする。本研究では架空の出来事（フィクション）や体験談（ノンフィクション）

⁶ 以下、「非日本語学習者」とする。

⁷ 堀江・パルデシ（2009）内の用語である。

ン)をナラティヴ(語り)と捉えて同様のストーリー描写課題を分析している南(2018)、小口(2018)に倣い、Labov(1972)の提唱するナラティヴの構成要素である、起きた事件は具体的に何なのかという「出来事(Complication Action)」、そのときの話し手の気持ちはどうだったのかという「評価(Evaluation)」に着目して分析を行う。Labov(1972)の提唱するナラティヴの構成要素は表1のとおりである。

表1 Labov(1972)の提唱するナラティヴの構成要素

要旨・導入部 (Abstract)	話の最初に、何についての話なのかを聞き手に伝える
設定・方向付け (Orientation)	誰が、いつ、どこで、何を(していたか)
出来事(Complication Action)	起きた事件は具体的に何なのか
評価 (Evaluation)	話し手の気持ちはどうだったのか、話の意味は何なのか
解決・結果 (Resolution/ Result)	事件が最高潮を迎えた後、結局どうなったのか
統語・終結 (Coda)	話の最後の締めくくりの言葉、そして聞き手との現在へ

(南(2017:50)からの引用)

南(2018)はLabovのナラティヴ内容分析の主眼は、語りの後景描写にあり、なかでも語り手や登場人物の態度や思考、感情を表現する「評価」にあると述べ⁸、そうした「共感度・感情移入」を理解する上でも「結束性」に関わる「態」の選択や、一貫性を支える視点がどうおかれているのかが重要であると述べている。

そこで、場面⑤において能動態と受動態のどちらが用いられているのか、視点が「犬」か「ケンとマリ」どちらに置かれているのか、さらに奥野(2018)で指摘された「評価」にかかわる「残念でした」「悲しかった」などの情意表現が用いられているか否かを分析の観点とする。

なお、機能類型論の立場から受動構文の機能類型を追究したGivón(1981)が提案した機能類型⁹と益岡(1987,1991)¹⁰による日本語の受動構文の分類がほぼ対応していると堀江・パルデシ(2009)が指摘し、その対応関係を示している(表2)。これによると今回分析の対象とする「犬にサンドイッチを食べられてしまっていた」という事態はGivón(1981)の言う「被動作者の話題化」と益岡の言う「受影受動文」に相当すると言える。また、益岡(1991)によると客観的表現である降格受動文に対し、受影受動文は主体の側から当該の事象を描くという意味において主観的な表現であると

⁸ 評価は“So what?”という質問に応えるものとされる(Labov1972:370)。

⁹ Givón(1981)は、様々な言語における受動構文の多用なバリエーションを分析することで、その典型的な機能領域が浮き彫りになるとして「被動作者の話題化」「動作主の非焦点化」「動詞の状態化」を受動構文の主な機能領域(functional domain)として提示している。

¹⁰ 益岡(1991)は受動構文のある出来事から主体が直接的、間接的になんらかの影響を受けるという事態を「受影受動文」、能動文の主語(動作主)の背景化(backgrounding)を行う「降格受動文」、ある対象の性質・特徴を表現する「属性叙述受動文」に分類している。

されている。

表2 受動文の類型・分類：Givón (1981)、(益岡 1987, 1991)

Givón (1981)	益岡 (1987,1991)	例 (益岡 1991) より
被動作者の話題化	受影受動文	私はそのことで親に叱られた。
動作主の非焦点化	降格受動文	回答用紙が回収された。
動詞の状態化 (脱他動化)	属性叙述受動文	花子の家は高層ビルに囲まれている。

堀江・パルデシ(2009:192)からの引用 (一部修正)

3.4. 分析方法

今回データを収集した中国語を母語とする非日本語学習者、ドイツ語を母語とする非日本語学習者 (以下 CC、GG) の母語によるストーリー描写の結果は、図1の場面⑤に相当する箇所を抜き出し、日本語訳を加えた。そして「犬にサンドイッチを食べられてしまっていた」という出来事・評価部に相当する箇所を中国語、ドイツ語を母語とする日本語学習者 (以下 CJ、GJ)、及び日本語母語話者 (以下 JJ) が日本語でどのように産出するのか、CC、GGによる各母語ではどのように産出するのかについて、以下のA～Cの3点を分析の観点として、まずはS課題、W課題ごとに分類を行う。尚、1人につき該当箇所を1ケース (1回) として捉え、その記述について分析した。

A：(能) 能動態を使用しているか。「犬」に視点がある場合 (例1) と「ケンとマリ」に視点がある場合がある (例2)。

(例1) 犬はすべてのサンドイッチを食べてしまいました (GAT45)

(例2) えーと、で、そして、バスケット (バスケット) の中身を見たときに犬が全部を、食べてしまいました (GAT46)

B：(受) 受動態を使用しているか。「食べ物 (サンドイッチ)」が主語になることが多く、「ケンとマリ」に視点が置かれる。

(例3) しかし、バスケットの中では、食べ物は既に犬に食べられました。マリさんとケンさんはとてもがっかりでした (CCM52)

C：(情) 「悲しい」「がっかり」などの評価を示す情意表現が含まれているか

紙幅の関係上、全てのデータを掲載することはできないが CC と GG の S 課題の分析例を表3、表4にあげる。なお、日本語学習者の発話で、例4のように、助詞の誤用などから受動態か能動態か判断できないものはカウントから除外した。

(例4) あー、その (連体詞) バスケット、に一見、てー、おーん、サンドイッチと林檎ーは全部、あー犬に食べました がっかりしました (CCM28)

表3 CCのS課題 分析例

ID	原文／訳文	能	受	情
CNS01	<p>肯尼和瑪莉難過驚訝的看進野餐盒裡 發現東西都被吃完了 很難過因為他們肚子很餓</p> <p>ケンとマリは悲しそうに驚いた顔でバスケットの中を覗き、物が全部食べられてしまったことに気づき、悲しかった、なぜなら彼らはおなかがついているからだ</p>		○	○
CNS02	<p>肯尼很傷心</p> <p>ケンは悲しかった</p>	— ¹¹		○
CNS 03	<p>發現他們的狗從籃子裡面跳出來並且把食物吃的精光 然後 所以他們兩個看到食物被吃完之後很難（過）</p> <p>（彼らは）犬がバスケットから飛び出し、そして食べ物をひとつ残らずに食べたと感じた。そして、だから、二人は食べ物が一つ残らず食べられてしまったのを見て悲しかった</p>		○	○

表4 GGのS課題 分析例

ID	原文／訳文	能	受	情
GNS01	<p>Als sie ... Sie sind losgegangen und als sie angekommen sind und den Korb auf'macht (aufgemacht) haben, ist ihnen der Hund entgegen gesprungen und sie sind erschrocken und sie waren sehr traurig, weil der Hund alles aufgeessen hat, was sie mitnehmen wollten.</p> <p>彼らが出かけて、着いて、バスケットを開けたとき、犬が彼らに向かって飛び跳ね、彼らは驚いた。そして、犬が持ってきたかったものをすべて食べたので、彼らはとても悲しかった</p>	○		○
GNS02	<p>Und beide waren ziemlich überrascht. Denn das Essen war äh, alles schon aufgeessen.</p> <p>彼らはかなり驚いた。なぜなら、食べ物がすでに食べられていたから</p>		○	○
GNS03	<p>Und ... ähm... als sie in den Korb gesehen haben, haben sie gesehen, dass der Hund das Essen angegessen hat.</p> <p>彼らがバスケットの中を見たとき、犬が食べ物を食べたのを見た</p>	○		

その上で、日本語学習者（CJとGJ）と非日本語学習者（CCとGG）の結果、母語を同じくする日本語学習者と非日本語学習者（CJとCC, GJとGG）の結果、日本語母語話者と日本語学習者（JJとCJ, JJとGJ）の結果をクロス集計し、能動態と受動態

¹¹ 文自体は能動態であるが、「犬に食べものを食べられてしまっていた」という事態への言及が明示的でないため今回はカウントから外した。このようなケンやマリの心情描写のみのケースはCNSに3ケース、GNSに3ケース見られた。

の使用傾向について χ^2 検定を用いて分析を行う。

4. 結果

S 課題及び W 課題における被調査者の能動態・受動態の使用傾向は表 5 のとおりであった。

表5 被調査者の能動態・受動態の使用傾向

産出タイプ 態 対象群	S課題		W課題	
	能動態	受動態	能動態	受動態
JJ (日本語)	3	12	7	8
CJ (日本語)	4	9	4	11
CC (中国語)	1	10	4	8
GJ (日本語)	10	2	11	3
GG (ドイツ語)	12	3	11	1

各被調査者群の課題間における、能動態と受動態間の使用傾向は、どの群においても統計的な有意差は認められなかった (JJ: ($\chi^2=2.40$, $df=1$, $p=.12$, *n.s.*), CJ: ($\chi^2=0.06$, $df=1$, $p=.81$, *n.s.*), CC: ($\chi^2=1.98$, $df=1$, $p=.16$, *n.s.*), GJ: ($\chi^2=0.09$, $df=1$, $p=.76$, *n.s.*), GG: ($\chi^2=0.72$, $df=1$, $p=.40$, *n.s.*)). つまり、S課題かW課題かという課題の違いによって能動態か受動態かという使用傾向には差がないと言える。このことから、S 課題と W 課題における能動態、受動態ごとに合算し、日本語学習者 (CJ と GJ) と非日本語学習者 (CC と GG)、母語を同じくする日本語学習者と非日本語学習者 (CJ と CC, GJ と GG)、日本語母語話者と日本語学習者 (JJ と CJ, JJ と GJ) をそれぞれクロス集計後、 χ^2 検定を行った (表 6)。

まず、日本語学習者 CJ と GJ、非日本語学習者 CC と GG をそれぞれクロス集計した後、 χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差が認められた (CJ-GJ: ($\chi^2=14.77$, $df=1$, $p<.01$), CC-GG: ($\chi^2=20.29$, $df=1$, $p<.01$)). 次に母語を同じくする日本語学習者と非日本語学習者 (CJ と CC, GJ と GG) について χ^2 検定を行った結果、いずれも有意差は認められなかった (CJ-CC: ($\chi^2=0.31$, $df=1$, $p=.58$, *n.s.*), GJ-GG: ($\chi^2=0.18$, $df=1$, $p=.67$, *n.s.*)). つまり、CJ と GJ による日本語での産出においても、CC と GG による母語での産出においても、母語が異なる場合には能動態か受動態の使用による有意な差があると言える。また母語が同じ場合、日本語で産出するか母語で産出するかによる能動態と受動態の使用傾向に差はないと言える。

また、中国語母語話者である CJ と CC、ドイツ語母語話者である GJ と GG をそれぞれクロス集計した後、 χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意な差が認められなかった (CJ-CC: ($\chi^2=0.31$, $df=1$, $p=.58$, *n.s.*), GJ-GG: ($\chi^2=0.18$, $df=1$, $p=.67$, *n.s.*)). つまり、同じ母語の場合、日本語で産出するか母語で産出するかにかかわらず態の使用傾向に差

はないと言える。

さらに先行研究で指摘されていた日本語母語話者と日本語学習者についても検定をかけたところ、JJ、CJ 間には有意差が見られなかったが、JJ、GJ 間には有意差が見られた (JJ-CJ : ($\chi^2=0.13, df=1, p=.72, n.s.$), JJ-GJ : ($\chi^2=6.79, df=1, p<.01$)). つまり、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の使用傾向に差はなく、日本語母語話者とドイツ語を母語とする日本語学習者には有意な差があると言える。

表6 能動態と受動態の使用傾向・ χ^2 検定統計値・p 値表

対象群		能動態	受動態	χ^2	p 値
異なる母語話者間の比較	CJ	8	20	14.77	<.01
	GJ	21	5		
	CC	5	18	20.29	<.01
	GG	23	4		
同じ母語話者間の比較	CJ	8	20	0.31	.58
	CC	5	18		
	GJ	21	5	0.18	.67
	GG	23	4		
日本語母語話者と学習者間の比較	JJ	10	20	0.13	.72
	CJ	8	20		
	JJ	10	20	6.79	<.01
	GJ	21	5		

これらのことから、日本語学習者が非学習者かという属性にかかわらず異なる母語の場合には有意差があること、産出言語にかかわらず同じ母語の場合には有意差がないことが明らかとなった。つまり、「犬にサンドイッチを食べられてしまっていた」という事実をどのように語るのかについて、受動態と能動態の使用傾向は母語と L2 で同様であり、中国語母語話者は受動態使用がドイツ語母語話者と比較して有意に多く、ドイツ語母語話者の能動態使用は中国語母語話者と比較して有意に多いと言える。

最後に、能動態・受動態における情意表現が使用されている文数を表7に示す。

表7 能動態・受動態における情意表現使用数
(情意表現使用数/能動態・受動態文数)

	JJ	CJ	CC	GJ	GG
能動態	5/10	6/8	2/5	2/21	10/23
受動態	13/20	12/20	5/18	0/5	2/4

日本語母語話者 (JJ)、中国語母語話者 (CC、CJ) は能動態においても受動態においても情意表現を使用しているケースがあるが、ドイツ語を母語とする日本語学習者 (GJ) は、受動態を使用する際には情意表現を用いておらず、日本語学習者 (GJ) は受動文を使用する際に情意表現を用いない傾向にあることが窺えた。

5. 考察

「犬にサンドイッチを食べられてしまっていた」という事実をどのように語るのかについて、受動態と能動態の使用傾向は日本語学習者か非学習者かという属性にかかわらず異なる母語の場合には有意差があること、産出言語にかかわらず同じ母語の場合には有意差がないということから、母語の影響の可能性が高いことが明らかとなった。それは目標言語である日本語と、母語であるドイツ語と中国語のどのような違いからくるのであろうか。

「犬にサンドイッチを食べられた」のような日本語の被害を表現する受動文は主語の側から出来事を描く、つまり心理的に主語に接近して事象を描く受動文であり、「誰の立場から出来事を見るか」という点で能動文と異なると考えられる。

ドイツ語と日本語の受動態について考察している成田 (1996) では、日本語のこのような受け身文を「共感受身文」と呼び、「この雑誌は 10 代の若者によく読まれている」のような受け身文を「中立受身文」とした上で、日本語では「共感受身文」がプロトタイプであると指摘している。そして、ドイツ語の日本語の受動態の違いについて、ドイツ語にも日本語の受動態に相当するものは存在するが、日本語のような「共感受身文」はドイツ語には存在せず、「中立受身文」のみであることを指摘している¹²。また、ドイツ語の受動文は久野 (1978) が指摘する「どこから見るか」という語り手がどのアングルから出来事を描写するかという視点（「カメラ・アングル」）よりも、むしろ「どこに目を向けるか」という「ピント」に関して能動文と異なると考察している。今回 GG の S 課題と W 課題合わせて 27 ケースのうち 23 ケースが能動態であったことからドイツ語では「犬がサンドイッチを食べた」と能動文で語る方が自然であることがわかる。

今回 CC の中国語によるストーリー描写を見ると、受動態はいずれも例 5 のような「被」を用いた構文であった。

(例 5) 這時候、小狗突然從籃子裡跳了出來、食物都【被】吃光了 (SW:CNS05)

その時、犬はバスケットから急に飛び出して、食べ物全部食べられてしまった

¹² これは前述した堀江・バルデシ (2009) が対応関係を指摘した Givón (1981) の言う「被動作者の話題化」と益岡の言う「受影受動文」に相当し、受動態をプロトタイプの的に考える点も Givón (1981) と矛盾しない。

中国語の受動文において最もプロトタイプ的な‘被字句’は、基本的に好ましくないこと、不本意なことに使われる（大野 1993）ことから、今回の場面においては、中国語母語話者にとっては受動文を用いて語ることがより自然であったと考えられる。日本語においても、何らかの影響をこうむった人を主語にして、その人に起こった出来事を受動態で表現（南 2017）し、中立の立場からではなく、主体の側から当該の事象を描く（益岡 1987）ことから、CJ の使用傾向は JJ と有意差がなく、GJ とは有意差が見られたと考えられる。これは、受動構文の使用に見られる言語間の相違は描写の対象である事態の捉え方の違いに由来するとして堀江・パルデシ（2009）が主張する、東アジアの中の言語における受動構文は主観性が高く、英語などの印欧語は主観性が低く位置付けられているとする主観性の尺度を裏付けるものでもあろう。

また、中浜（2016）は、日本語話者が物語を構築する際、視点を特定の登場人物にあて、その人物を中心に話を展開していくのに対し、英語話者は、起こった出来事に焦点を置いてストーリー構築をする傾向があるとされていることを示しており、水谷（1985）は前者のような傾向を持つ日本語を「立場志向」、後者のような英語を「事実志向」の言語としている。奥野（2018）において英語母語話者を分析した結果、受動態と能動態の使用傾向はドイツ語母語話者と同様であり、「犬が全部食べてしまいました（GAT16）」のように出来事に焦点において能動態で語ることが示されており、前掲した成田（1996）においても日本語のような「共感受身文」はドイツ語には存在せず、「中立受身文」のみであると指摘されていることから、ドイツ語も「事実志向」の言語であると考えられよう。中浜（2016）は、事実志向の言語を母語に持つ学習者にとって、立場志向をとる日本語の習得上、「視点」のような概念や意味が含有されるものに関しては母語からの影響は避けがたいものであると指摘し、これは母語での概念が L2 習得に影響を与える「概念の転移」（Conceptual Transfer）であると指摘している¹³。同じ母語話者間の比較である CJ と CC、GJ と GG に有意な差がなく、異なる母語話者間の比較である CJ と GJ、CC と GG に有意な差があったということは上述した認知類型論的な違いによる概念の転移の可能性を裏付けるものと考えられよう。また、各群ともに課題による使用傾向に有意な差がなかったことから、プランニングの差に関わらず母語の差が見られたと言えよう。

なお、GJ の受動態に情意表現が見られなかったことについては、ドイツ語母語話者は主観を表現せず、事態の客観的事実のみを表現する傾向にあることと関連している可能性が窺えるが、今回は受動態自体の産出が少ないことから、さらに多くのデータを収集して検討する必要がある。

¹³ このような「概念の転移」が L2 談話において視点の置き方に現れることは他の研究でも指摘されている（栗原・中浜 2010、南 2017 等）。統語や語彙と比較して概念的要素は習得しづらく、それは気づきの欠如とも関わっているとされる（Jarvis and Pavlenko 2010、Odlin 2005）。

6. まとめと今後の課題

本稿では、先行研究で指摘されていた I-JAS におけるストーリー描写課題の学習者と日本語母語話者の語りにおける能動態・受動態の使用傾向の違いについて、学習者の母語である中国語とドイツ語によるストーリー描写課題データを収集し、学習者の L2 での結果と比較しながら、母語の違いによる影響についての検討、考察を行った。その結果、「犬にサンドイッチを食べられてしまっていた」という事実をどのように語るのかについて、受動態と能動態の使用傾向は母語でも L2 でも同様であり、中国語話者は受動態使用がドイツ語話者と比較して有意に多く、ドイツ語話者の能動態使用は中国語話者と比較して有意に多いことが明らかとなった。そしてそれには認知類型論的観点による言語による受動態に関する主観性の違いが影響していることを指摘した。本稿は母語数もサンプル数も少ないパイロットスタディではあるが、このように、日本語学習者データから得られた母語によって異なる傾向について、母語によるデータとの比較から、母語の影響について検討したことの意義は大きいと言えよう。

ただ、本稿ではストーリーの一場面のみを対象としており、ストーリー全体を通した視点の置き方の分析には至っていない。また、能動態、受動態の使用における情意表現との関連もデータの少なさからまだ明らかにはなっていない。語りの構成要素をどのように表現するのかという視点から、より大きな流れの中で検討していくことも必要であろう。

I-JAS は第四次データが公開され（2019 年 5 月 11 日現在）、各被調査者数もさらに増えた。コーパスが整備され、今後更なる知見が蓄積されることが期待される。

参考文献

- 大野純子(1993)「中国語の受動文をめぐって」『藝文研究』vol.64 慶応義塾大学藝文学会 pp.193-210.
- 奥野由紀子(2000)「第二言語習得における言語転移の認証—先行研究からの課題—」『教育学研究紀要 第二部』vol.46, 中国四国教育学会 pp.384-389.
- 奥野由紀子(2016)「『話す』と『書く』に見られるバリエーションには何が起因しているのか?—ストーリー描写課題の結末部に着目して—」『第 1 回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム予稿集: 学習者コーパス(I-JAS)を利用するために』国立国語研究所.
- 奥野由紀子(2018)「日本語学習者に共通して見られる現象と母語による違い—I-JAS のストーリー描写課題の分析より—」『日本語教育連絡会議 2017 論文集』vol.30, Papers presented at the 30th International Conference on Japanese Language Teaching 2017, pp.67-75.
- 奥野由紀子・ディアンニリスダ(2015)「『話す』課題と『書く』課題に見られる中間語変異性—ストーリー描写課題における「食べられてしまっていた」部を対象に—」『国立国語研修所論集』vol.9, pp.121-134.
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館.

- 栗原由華・中浜優子(2010)「ストーリー構築における視点—日本語母語話者と上級日本語学習者との比較から—」南雅彦(編)『言語学と日本語教育VI』pp.141-156. くろしお出版.
- 小口悠紀子(2017)「談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較」『日本語/日本語教育研究』vol.8, pp.215-229.
- 小口悠紀子(2018a)『『話す』と『書く』という課題の違いが中級学習者の語りに及ぼす影響—個人内における接続表現の変異に着目して—』『日本語/日本語教育研究』vol. 9, pp.183-196.
- 小口悠紀子(2018b)「日本語学習者の物語発話に現れる評価表現」『第4回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム予稿集：第二言語習得における語彙の役割』pp.20-29. 国立国語研究所.
- 迫田久美子(2019)「話すタスクと書くタスクに見る日本語のバリエーション—日本語学習者コーパス I-JAS の分析に基づいて—」『学習者コーパスと日本語教育研究』pp.151-168. くろしお出版.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子(2016)「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』Vol.6, No.3 国立国語研究所 pp.93-110.
- 徐乃馨(印刷中)「日本語学習者のストーリー描写における名詞修飾使用実態—作業課題・習熟度・母語による違いに注目して—」『日本語／日本語教育研究』vol. 10, 日本語／日本語教育研究会.
- 砂川有里子(2016)「中級以降で指導が必要なテシマウの用法について—学習者と母語話者の使用状況調査に基づく考察—」平成 26～28 年度科研費基盤研究 (B) (一般) 研究成果報告書『日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究』pp.169-184.
- 中浜優子(2016)「機能主義的アプローチに基づく第二言語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第 19 号, 第二言語習得研究会 pp.61-81.
- 成田節(1996)「ドイツ語と日本語の受動態について—その意味の相違—」『ドイツ文学』vol. 97, 日本独文学会 pp.122-133.
- 堀江薫・パルデシ, プラシャント(2009) 山梨正明(編)『認知言語学フロンティア⑤言語のタイポロジー —認知類型論のアプローチ—』研究社.
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版.
- 益岡隆志(1991)「受動表現と主観性」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp.69-76. くろしお出版.
- 水谷信子(1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版.
- 南雅彦(2017)『社会志向の言語学—豊富な実例と実証研究から学ぶ—』くろしお出版.
- 南雅彦(2018)「日本語学習者の『語り』から見えてくる習熟度—語彙・時制・視点—」第4回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム：第二言語習得における語彙の役割予稿集 pp.10-19. 国立国語研究所.

- Givón, T. (1981). The Binding Hierarchy and the Typology of Complements. *Studies in Language* 4, 333-377.
- Jarvis, S. & Pavlenko, A. (2010). *Crosslinguistic influence in language and cognition*. New York: Routledge.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the Black English vernacular*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Odlin, T. (1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odlin, T. (2005). Cross-linguistic influence and conceptual transfer: What are the concepts? *Annual Review of Applied Linguistics* 25, 3-25.

付記

本研究は、科学研究費助成研究基盤 A「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」(課題番号: 16H0193, 研究代表者: 迫田久美子) に関する研究成果の一部である。

(おくの ゆきこ・首都大学東京)

(うー ちゃーいん・首都大学東京客員研究員)

(むらた ゆみこ・首都大学東京大学院博士後期課程)